

## 屑の上

彼は落下するここへ  
便りも来ないこの地上  
屑の上で暮らす  
壁の前に腰掛け  
時計を見つめる

心地良い表面に  
隠れて腐った地底  
屑の上に伸びた  
木の枝の赤いツボミ  
開花せず落ちた

## からっぽの水瓶

周囲から鳴る言葉  
歩いた道の草花  
書かれた文字の断片  
繋がり合う意識  
与えられた印が外れて  
ひとつの核が現れる

溢れることのない  
からっぽの水瓶

誰にもそなわる光  
認識した一握りに  
積みも積もった本能と  
苦悩と絶望のジェネレーション  
価値を定めた戦いは  
何時終わるともわかりはしない  
溢れることのない  
からっぽの水瓶

## 忘れた世界

やわらかいシワのすきま  
写し出される姿形  
手を加えて生まれたもの  
おのずから認識されたもの  
真逆さまに転げ回る  
忘れた世界

取り上げられた行いは  
異なった目で見下す  
背景の中に生じる  
現れた唯一の出口  
作られたその場のありさま  
忘れた世界

## 私の季節

窓に差し込む  
明るい日射し  
小鳥の声が  
遅い朝を知らせ  
時計は昼過ぎ  
家中の静けさ

午後の日射し  
きららかに強く  
季節の変わりを告げる